

## 責任を論ずるために

——石原吉郎をめぐって——

池上哲司

はじめに

われわれは毎日の生活で責任という言葉をさまざま文脈で使用する。あるときには社会的関係で、またあるときには法的関係で。いずれにせよ、ある一定の関係を離れて、責任を問題にすることは不可能である。しかし、逆に責任をこれらの関係だけに限定することはできないだろう。というのは、まずもって責任が他者との関係において顕在化することは疑いえないとしても、その責任を責任として最終的に確認し引き受けるのは自分以外にないからである。つまり、責任は他者との社会的関係あるいは法的関係に還元しえない、自己自身との関係という側面を有しているのである。したがって、この側面が見落され、ないしは無視

されることで、責任は平板化し空疎なものとならざるをえない。また、言葉だけのそういった責任に出会うとき、われわれは索漠とした気持を味わわされることになる。

だが他方、われわれが自己の在り方を冷静に省みるならば、責任という言葉をなんの後ろめたさも感じずに使うことはできないはずである。というのも、責任を負う主体としての自己なるものを、われわれはもはや無条件に肯定し主張できないからである。われわれは何処に立ち、どのようなものとして自己を了解しているのか。この間に明確に答えることができ、はじめてわれわれは責任という言葉を使う資格を得るのである。

われわれは未だその解答を見出しえていない。それなのに、あたかも自らが責任主体として立ちうるかのように、

われわれは責任を語る。他人の誤りを前にして、その責任を問うとき、われわれの立場は無条件に正しいものとして前提されている。たしかに、誤りを犯した者とそうでない者との間には絶対的区別が存在する。しかし、事実として誤りを犯していないからといって、その立場や見解が無条件に正しいことにはならない。そもそも無条件に正しい事柄というのはほとんどない。いや、少なくともきわめて稀である。したがって、なにかが無条件に正しいと主張されるとき、われわれはむしろ立ち止まって考えなければいけない。本当にそうなのか、なにか条件を見落しているのではないか、自明でないものを自明としているのではないかと。

責任を他者との関係に還元できないことを感じつつも、それらを越えた責任を可能にする主体としての自己を確信することもできない。これがわれわれの陥っている状況である。ここから抜け出すことは決して容易ではない。だからといって、他者との関係でのみ責任を論ずることも、責任主体としての自己を無前提に認めることもできない。なぜならば、このときわれわれは責任にとって不可欠な誠実性というものを破壊することで、すでに責任とは逆方向へ

と歩みだすことになるからである。では、どういふかたちで責任というものへ近づけることができるのであろうか。つまり、われわれはどのような仕方でも責任主体としての自己となりうるのであろうか。

### 一 告発の放棄

誰の責任であれ、なにについての責任であれ、責任にはつねに告発という行為が付随して考えられている。たとえば、工事の落ちこみであれ、自動車事故であれ、責任が問題となるのは、誰かが誰かの責任を告発することをおしてである。そして、この場合、告発する者はその責任が問題とされる範囲の外に立っている。いわば、責任を決して問われることのない者が、他者の責任を問題にすることになる。告発ということがなされる時点で、すでに役割は決定しているのである。告発される者が悪であり、告発する者は善である。しかし、これは嘘である。告発される者がある程度以上の善が保証されるわけでもない。いずれにせよここでは、責任を自ら問うという責任主体としての自己という契機も、それを問う者の側の主体としての自己の確

立ということも、まったく問題とならない。むしろ告発によって責任の核心が隠されてしまうのである。

この主体としての自己という問題を、問う者と問われる者の一人の人間としての重みという仕方と考え続けたのが、詩人の石原吉郎であった。彼は戦後のソビエトでの強制収容所体験をおして、他者を告発しないという姿勢を獲得する。そして、広島の原因告発に関して、自分が発言しない理由を三つ挙げる。

人間は情報によって告発すべきでない。その現場に、はだしで立った者にしか告発は許されない……。

（『海を流れる河』花神社、一九七四年、一一頁。）

つまり、広島を目撃者でない石原は広島について発言しないというのである。

第二に、広島告発、すなわちジェノサイド（大量殺戮）

という事実の受けとめ方に大きな不安があるという。

私は、広島告発の背後に、「一人や二人が死んだのではない。それも一瞬のうちに」という発想があることに、つよい反撥と危惧をもつ。一人や二人ならいいのか。時間をかけて死んだ者はかまわないというのか。（同書、一一頁。）

石原は「一人」こそが広島の原因であると考えている。なぜならば、ジェノサイドを量の恐怖としてしか告発できない者は、統計的発想によっているのであり、「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ。」と語るアイヒマンと変わるところはないからである。

第三に、告発する者がついに死者ではないという事実が指摘される。

死者に代って告発するのだというかもしれない。だが、「死者に代る」という不遜をだれがゆるしたのか。（同書、一一頁。）

第一の理由で言われている、その現場にはだしで立つとはどのようなことであろうか。素直に考えれば、広島で原爆にあつた者ということになろう。それならば、現在なされている告発も充分意義のあることと言えるはずである。しかし、石原が考えているのはもつと先の点である。

いまは、ようやく死者が、生者を告発するときである。生きのびた者が、生きのびたという事実のほんとうの意味を理解もせず、生者が生者を告発し、死罪を宣告することによってわずかにつぐないを果たしたと思つた時代は終つた。いまは、生者が最終

的に死者に告発されるときである。(同書、二二二頁。)

死者が生者を告発するという構図こそが石原の考えていたところであった。生者は生きていくことによって、死者とは決して和解しえないと石原は主張する。だからこそ、第三の理由において、死者に代るといふ不遜が批判されたのである。そして、ここに第二の理由で述べられた「一人」という視点が加わることで、石原の考える告発の特異さが生れてくる。つまり、われわれは生者とよばれる集団として告発されているのではなく、一人の生者として一人の死者によって告発されているということになるのである。この発想はわれわれを鋭く撃つ。なぜならば、われわれは強制収容所も体験していなければ、原爆の熱線を照射されてもいながゆえに、ソビエトのレーゲリや広島島の原爆を告発する資格はないにもかかわらず、ついついなんの疑いもたずそれらをこれまで告発し批判してきたからである。われわれは石原によって、沈黙を指示されていると思われる。しかし、この沈黙は永遠に破りえないのだろうか。石原の文章を読むさいに、これは避けて通れない問題であり、本論もまたこの問いに答えるために試みられているのである。

そこへ至るためにわれわれはいったん迂回し、「一人」という視点に含まれた意味を考えることにしよう。一人の生者としてとは、すでに明らかであるように、量の問題ではない。徹頭徹尾、質の問題であり、この場合は主体としての自己の自立ということが重要なのである。しかし、自己の自立といっても、その自己は一般的な自我でもなければ、自意識でもない。それは、あくまでも特定の状況のうちに置かれた特定の自己である。そうでなくては、「一人」ということは決して言いえないからである。それでは、特定の状況のうちにある者はすべて「一人」という仕方自立しているのであるか。そうではない。われわれはさまざまな体験をしてきたからといって、それがそのまま自己の自立を確証するものではないからである。大切なのは、特定の状況において、どのような在り方をしていたかである。つまり、そのとき自己を主体として屹立しえていたかどうかの問題なのである。石原が考えていたのは、状況から課せられたものを、強いられたものを、自分自身で自覚的に獲得しなおすところに生ずる自己であったと言えよう。

花であることですか

拮抗できない外部というものが

なければならぬ

花へおしかぶせる重みを

花のかたちのまま

おしかえす

そのとき花であることは

もはや ひとつの宣言である

ひとつの花でしか

ありえぬ日々をこえて

花でしかついにありえぬために

花の周辺は的確にめざめ

花の輪郭は

鋼鉄のようでなければならぬ

〔花であること〕『石原吉郎詩集』思潮社、一九

六九年、五八頁。）

告発がなされうるとすれば、このような一人の生者に対して、一人の死者から告発がなされる。しかし、本当はこ  
のとき、死者は死んでしまっていてすでにいないのである。  
ここで、第三の理由として挙げられていた事柄が関係して  
くる。死者と生者は決してその位置を交換できないという

事実によって、死者と生者とは絶対的に切断されている。

つまり、死者は一人の死者として告発する資格を有するが、その告発の声は実際には発話されることなく黙したままである。こうして結局、石原吉郎にあつては、生者は告発を放棄し、死者は告発をできないままに不在であり続ける。とすると、石原の主張はまったくの無意味でしかないのであろうか。

生きのびて生きているということは、私には大へんおもたいたい事実である。この事実には、おそらく解決というものはない。私には、ただそれを担いつづけるという行為があるだけだ。〔海を流れる河〕、二四頁。）

もし死者の不在が生者によって担いつづけられるのでなければ、告発の放棄ということもわれわれの怠惰の口実でしかないだろう。しかし、石原の告発の放棄とは、死者の不在を不在として凝視することであり、そこでこそ死者は一人の死者として、また生者は一人の生者として、たがいに向き合うことが可能となるのである。したがって、告発の放棄とは優れて積極的な行為であり、無意味なものではない。告発することで隠されてしまうわれわれの在り方を

吟味し続けるために、われわれは告発を断念しなければならぬ。

断念とは、きわめて明確な行為であるとともに、行為そのものの放棄でもあるわけです。私が「断念そのもの」といったことばで考えるのは、いわばそのような放棄のすがたであります。そして人が断念において獲得するのにもまた明確さであります。(『断念の海から』日本基督教団出版局、一九七六年、一〇一頁。)

では、断念によって何が明確になり、告発によって何が曖昧になるのでしょうか。

## 二 加害者と被害者

告発という姿勢を支えているのは、加害者と被害者という抽象的な対立関係である。この対立を絶対的なものとして主張することではじめて、生者による生者に対する告発が可能となる。抽象的とは、文字どおりその現場の状況を抜きにした、つまり、自らが在るということと他者が在るということが直に結びついていることの捨象によって生れる。前章で明らかにしたように、ここでは告発する者と

告発される者との、主体としての一人の重さは出てきやうがないのである。告発する者が被害者の立場に立つかぎり、告発する者は名をもたぬ者として存在せざるをえない。そして、名をもたぬとは、主体ではないということである。

おそらく加害と被害が対置される場では、被害者は〈集団としての存在〉でしかない。被害においてついに自立することのないものの連帯。連帯において被害を平均化しようとする衝動。被害の名における加害的発想。集団であるゆえに、被害者は潜在的に攻撃的であり、加害的であるだろう。(『望郷と海』筑摩書房、一九七二年、三三頁。)

人は名をもつことよって人となる。人を名をもたぬ者として扱う社会は、あるいは体制は健全なものとはいえない。しかし他方、名をもたぬ者として扱われることに順応するのはわれわれ自身の墮落である。人は名をもって死なねばならないし、名をもって死のうとせねばならない。ソ連の強制収容所の独房の壁には無数の名が刻まれているという。生きて帰る希望をもてぬ者が己れの存在を名前に託さざるをえなかったのである。名をもって死ぬとは自立した人間として死ぬということであるが、そのためには己

れの名を確認してくれる者が必要なのである。ここに責任の本質を解く鍵が見出される。しかし、ここでは、責任を論ずるために考えておくべきことを点検するのが狙いであるから、名前と責任との関係についてはこれ以上立入らないことにしたい。

われわれは、被害者の立場に身を置く告発者になつてはならない。告発をしてはならないと石原は言う。われわれは被害者であると同時に加害者であることを知るべきであろう。われわれの生存は他者の生存を不可避的に侵食することでも成立しているのである。このことを承認するのは辛い。しかし承認せねばならない、もし名前をもって死にたいと思うなら。この名をもつということが、他者の名前を認めることでもある。なぜなら、名をもたぬ者は名をもたぬ者にしか出会わず、名をもつ者だけが名をもつ者に出会うからである。したがって、自己が他者の生存を侵食していることを認めてはじめて、自己と他者との連帯が成立するのである。この連帯は、

お互いがお互いの生命の直接の侵犯者であることを確認しあつたうえでの連帯であり、ゆるすべからざるものを許したという、苦い悔恨の上に成立する連

帯である。(同書、一九頁。)

石原吉郎の経験した連帯は、普通われわれが言う「人間の」という形容詞を冠せられないものであつたらう。というのは、連帯する者たちは、ただただ自己の生命の保持のみを目指していたのであり、そこではいわずゆる万物の霊長たる人間らしさなど微塵も存在していないように見えるからである。しかし、人間の精神性はどんな状況のうちでも存在する。精神の病と言われる精神分裂症の場合でさえ、症状を通して患者の精神性は他者であるわれわれに呼びかけているのである。一般にそう考えられているように、精神生活のうちのみ人間の精神性が存在しているわけではない。人間が生物としての人間としてのみ生きているように見える場合でも、人間はその十全の意味であくまでも人間なのである。したがって、普通の意味で人間的でない連帯も、人間の連帯と呼ばれてよい。それどころか、付属物を全くもたない裸の人間同志の、この不信の果ての連帯こそ真の連帯と呼ばれるべきものであろう。

これがいわば、孤独というものの真のすがたである。孤独とは、けつして単独な状態ではない。孤独は、のがれがたく連帯のなかにはらまれていた。そして、

このような孤独にあえて立ち返る勇氣をもたぬかぎり、いかなる連帯も出発しないのである。無傷な、よろこばしい連帯というものはこの世界には存在しない。(同書、一九二〇頁。)

被害者という立場に安住して無名の者にとどまることなく、自己に強いられた立場を、たとえそれがどんなに不条理なものであっても、事実として見つめなおし、納得する。

そこにあるものは

そこにそうして

あるものだ

見ろ

手がある

足がある

うすらわらいさえしている

見たものは

見たといえ

〔「事実」『石原吉郎詩集』一二二頁。〕

弁明することをやめ、納得して引き受ける。そこからしか一人の人間としてのわれわれの連帯は生れない。

わかつたな それが

納得したということだ

(略)

目をふいに下に向け

かたくなな顎を

ゆつくりと落とす

死が前にいても

馬車が前にいても

納得したと それは

いうことだ

(略)

うづくまるにせよ

立ち去るにせよ

ひげだらけの弁明は

そこで終るのだ

〔「納得」同書、一一一―一二二頁。〕

そのときはじめて、強いられた立場はひとつの「位置」となる。

### 三 位置ということ

われわれが生を営んでいく際、われわれはなんらかの「位



置」を取らざるをえない。そもそも、われわれがこうして在ること自体、一定の時間的空間的位置においてである。明らかに石原の考えている「位置」なるものは、このような単純な意味での位置ではない。しかし、よく考えてみると、この単純な意味での位置にもすでに「位置」のもつてゐる強いられたという性格があるのではなからうか。われわれは位置という言葉をどのように使うかをみてみよう。たとえば、位置を持つというのは変である。つまり、位置はわれわれの生れつきの能力としてあるわけではない。また、位置を取るとも言わないだろう。位置を占めるとか、位置するとか言うのが普通の表現であると思われる。ここに読み取ることができるのは、そこにそうあつてしまふ、あるいは、そのようにあらざるをえないというニュアンスである。

それでは、なぜ石原はことさらに「位置」という言葉づかいをするのであろうか。たしかに、生きていく過程でなんらかの位置をわれわれは強いられはする。だが、それによつて、われわれの「位置」なるものが完全に規定しつくされることにはならないからである。空間時間的に在ること、それ自体はなんともすることはできない。しかし、そ

の在るということを「位置」として捉え直すことのうちにこそ、その「位置」というものの実質があると思われるのである。この点を石原は日常ということに関連させて考えている。われわれがここにこうして在ること、これはまさに日常であり、どうしようもない事柄としてある。そこで、われわれはその日常なるものから逃れようとして、さまざまな試みをする。旅に出たり、趣味を楽しんだり、賭けに興じたりする。

放浪とは、いわば自己の〈位置〉を進んで放棄することである。日常のただなかでみずからの位置をたしかめつづけることが、いわば生きることへの証しであるなら、その位置を進んで放棄するという行為が、なんらかの決意なしに行なわれるはずはない。

〔海を流れる河〕、一五頁。〕

実は、この決意をめぐつて、石原は更に歩みを進めるのであるが、それについては後に触れることにしたい。いずにせよ、問題なのは、日常というものを徹底的に見極め、それを引き受けていくこと、つまり、強いられ限られた可能性を、自らが限定しなおすことによつて、非自由を自由へと転換することである。しかし、それは、ため息のど

ような、忍耐づよい、孤独な行為でしかありえない。というのは、みずからの「位置」を確認するということはわれわれの意志の領野に属することであるが、この行為によって何が生じるかは、ある意味でわれわれの手から離れるからである。こうして、われわれはまた強制された日常に出会う。つまり、石原に言わせれば、そのような行為をとおして知らされるのは、日常そのものである自分自身の異常さなのである。

それは闘争というような救いある過程ではない。自分自身の腐食と溶解の過程を、どれだけ先へ引きのばせるかという、さいごにひとつだけのこされた努力なのである。(同書、一六頁。)

いつさいは日常となりうるというのが、石原の到達した認識であった。日常ということでわれわれは、安穩とした日々の暮しを思い浮べるかもしれないが、石原にとっては、彼の経験した強制収容所の生活さえ日常なのである。いかなる悲惨も極限も日常となりうる。したがって、日常を引き受け、確認していく過程もが日常となってしまう。つまり、「位置」は確認されねばならないが、その確認もまた不断に続けられなければならない。とすると、この「位置」

なるものは定まることなく、動揺を余儀なくされるのではなからうか。ひいては、一人の主体として自立することもできず、責任を論ずることもできないことにならう。

実は、「位置」が固定的なものであると考えること自体が誤りなのである。たしかに「位置」は優れて固有なものではあるが、その固有性が固定性を意味するわけでは決していない。われわれは固有性を求めて、他者との関係を離れた純粹な自己自身を考えようとする。自己とはこれで、これ以外にないというふうになる。しかし、一章で引用した「花であること」という詩を思いだして欲しい。「花であることでは、拮抗できない外部というものがない。花であればならぬ」と書かれていたように、花が花であるためには、花を花とする外部を必要とする。換言すれば、固有性が成立するにあたっては、固有性を固有性とする外部が、すなわち他者が必要とされるのである。固有性という内部と他者と言う外部とが同時に成立するわけである。したがって、固有性は他者との関係のうちで、つねに動き続けることになる。

そうはいっても、やはり、動き続ける固有性ということ責任主体としての自己の確立が可能なのであるか。石

原の「位置」という詩をみてみよう。

しずかな肩には

声だけがならぶのでない

声よりも近く

敵がならぶのだ

勇敢な男たちが目指す位置は

その右でも おそらく

そのひだりでもない

無防備の空がついに撓み

正午の弓となる位置で

君は呼吸し

かつ挨拶せよ

君の位置からの それが

最もすぐれた姿勢である

〔「位置」『石原吉郎詩集』、一〇頁。〕

この詩について石原は、レマルク原作の映画「西武戦線異常なし」の兵隊が敵陣に突撃するときの場面にふれて次のように言う。

途中地面に伏せてしまうと、その地面からもう離れるのは絶対にいやになってしまう。その地面を離れ

た瞬間に別の空間に投げ出されてしまうわけですから、地面にかじりつきたい、それが位置という考え方に近いのです。（『一期一会の海』日本基督教団出版局、一九七八年、一一一頁。）

一見すると、石原はここで「位置」の固定性を言っているように思われる。その傾向はたしかにある。しかし、さきの詩の「君は呼吸し かつ挨拶せよ」という言葉によって、彼の「位置」からの他者に向けての働きかけが言われていることは明らかであろう。まさに、この働きにこそ、われわれの固有性が現れるのである。先に述べたように、他者との関係のうちで、他者に働きかけ、他者から働きかけられることをとおして、われわれの固有性は屹立して行く。だからこそ、石原は、突撃する兵士が次の瞬間に地面を離れて、死の待つ空間へ飛び出すところに、苛酷な自由の存在を認めるのである。位置を離れて位置へと到りつく、ここにある自由を、彼はまた、「ある一点にある姿勢で立つ」とも言う。こうしてわれわれは、いわば極限の「位置」とも言うべきものに直面することになる。

位置を離れつつ、ある一点に立つ。これは矛盾である。石原吉郎はこの矛盾を矛盾として抱えたまま歩み続けた。

その過程で、彼は「位置」の放棄という発想を獲得する。

そして、その位置を不退転の意志でささえぬくためには、進んでその位置を捨て去る自分の姿を、はるかなそのさきへつねに想定しておかなければならぬのである。(『海を流れる河』、一五頁。)

石原にあつては、極限において「位置」は捨て去られる。「位置」をも放棄する姿勢を、われわれは尚「位置」という言葉によって呼ぶことができるのであろうか。この地点で、われわれは石原に振りきられてしまう。固有性を働きと考えるなら、石原の「位置」はもつと柔軟なものでもありえたであろう。しかし、彼には、自らの固有性を固有性として肯定することは不可能であつたと思われる。なぜならば、石原にとつて、強制収容所から生きて帰つてきたということは、なんらかのかたちで人間としてやぶれ果てたということだからである。

生きて帰つてきたという事実そのものが、のがれがたく墮落であるという地点まで一度は自分を追いつめなければならぬのではないか。私に出発という行為があるとすれば、かろうじてそののちである。

(同書、四四頁。)

石原には出発という行為はついに訪れなかつた。彼は死ぬまで、人間としてやぶれ果てた地点に立ち止まりつくした。その地点とわれわれの地点とは、シベリアの強制収容所によって隔てられている。直に不条理を生きた者と生きたことのない者、その間には越えがたい深淵が横たわっている。現場にはだして立つたことのないわれわれには、シベリアにせよナチスのにせよ、強制収容所を告発することはできない。これは事実である。しかし、他に途はないのか。石原は責任の問題を告発ということから切り離すことで、自己責任に限局してしまつた。たしかに、責任というものが究極的には自己責任に関わるとしても、その責任は自己だけで担いうるものではないし、担うべきものでもない。というのは、自己の固有性は他者を必然の契機とするのであるから、自己責任が成立つたためにも、そこには他者が介在せざるをえないからである。

こうして、深淵に隔てながらも、石原とわれわれの立つ地点は何処かで結びついてはいるはずである。目の前の深淵を告発という行為によって埋めるのではなく、あくまでも自らの「位置」を確認し、さらに他者によって確認してもらうことによって、われわれは越えがたい溝を架橋するこ

とができるのではないだろうか。もちろん、その他者には、以下の言葉を語る石原吉郎も入っている。

ではどこに希望があるかと、人は問うだろう。それにはたいして、ほとんど私は答えるすべを知らない。ただ、私にしろうじて、しかも自己の言葉の責任においていえることは、逃げるな、負えるものはすべで負ってその位置へうづくまれということである。

(同書、一六一―一七頁。)

(いけがみ・てつじ 大谷大学助教授・倫理学)